パネル

現代韓国における死者供養の変化

についての社会学的考察

井上治代

本研究の課題は、産業化による社会変動にもなつて変容する死者供養の実態を、東アジア諸地域での並行的な事例の比較分析を通して考察することである。同時にそれは、次の二つのテーマを内包している。①巫俗・儒教・道教・仏教が習合した中国の「死者供養」を源流にもつ東アジア地域の現代における死者供養のあり方から、各地域の個別的な変遷を把握すること。②檀家制度を運営基盤にしてきた日本仏教が、近年、その基盤衰退ゆえに今後の行方を模索する中、檀家制度をもたない東アジア地域の仏教の展開から、日本仏教の今後のあり方を探ることである。本発表では、韓国における死者供養の変化について、「四十九齋」と「預修齋」に着目し、近年登場した「四十九齋保険」を中心に社会学的に考察する。

古代インドで形成された仏教は人間の死後四十九日(中陰)までを生まれ変わりの期間と想定したが、一世紀に中国へ伝わり、巫俗・儒教の影響を受け、特に道教の十王思想と習合して、祭祀期間が死後二年に拡大された。中国である程度成熟した「死者供養」システムは、韓国へは四世紀後半に、日本へは(韓国経由で)六世紀に伝えられ、その後、独自の展開をみせた。中国において仏教が道教の十王思想と習合していく過程で

つくられた『閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経』(『預修十王生七経』)には、①「生七齋」(預修、逆修)と、②「七七齋」(四十九齋、四十九日)という二つの儀礼の功德が説かれている。本来は生前に自分の死後の冥福のために行う「生七齋」が主であったという。日本では古くは「生七齋」(逆修)は存在していたが、現代ではその意味ではほぼ見とめられず「七七齋」が主である。一方韓国では、現代でも仏教寺院で「預修齋」が執り行われており、また四十九齋は仏教儀礼としてだけでなく、一般習俗化して定着している。キリスト教信者が四十九齋を行うことも珍しいことではない。そして近年、仏教寺院で四十九齋を行う人が増えていることが先行研究によって報告されている。自宅で多数の人が集まる儒教儀礼よりも、仏教寺院で儀礼を済ませたほうが楽という理由もあるという。

こういった状況の中で一九九九年に「四十九齋保険」が登場した。保険の企画・販促担当者は、その背景に「寿命が延びて、無縁故の年寄りが増えている」ことをあげる。さらに興味深いことに、パンフレットに「僧侶、無縁故老人仏教信者様らのための、老後の生活費・病氣治療費の必要性増大」とあり、妻帯しない韓国仏教の「僧侶」も対象となっている。実際に加入者の約一割が寺関係者であるという。その他の九割の人々について保険者と被保険者の関係を聞くと、①「本人が自分のために加入」が約七割、②「子どもが親のために加入」が約三割であるという。また①の場合、「子どもに迷惑を掛けたくない」が約六割、「四十九齋は非常にお金がかかるので、そのために貯蓄する」が約二割、「子どもが四十九齋を行うこと認めてく

れない」が約二割であるという。また「僧侶がこの商品を積極的に仏教信者に勧めているが、それは宗教的なことよりも経済的な理由で、寺を指定して未来の利益を保障するものだからである」との見解が聞けた。

「預修齋」は、寺の行事として閏月に行われている。筆者はソウルの奉元寺（太古宗）の預修齋に参加した。平日、朝から夕方まで続いたその儀式の参加者（約三〇〇人）は、ほとんどが女性であった。生前に功德を積んであの世に振り向けるという伝統に則った儀礼であったが、参加者へのインタビューでは、儀式本来の意味ではなく、健康祈願、就職、出世祈願など現世利便的な参加理由が返ってきた。そこには、儒教、巫俗、キリスト教、仏教が混在する宗教的多元性ゆえの韓国仏教における宗教的「寛容」がみてとれた。

パネルの主旨とまとめ

池上良正

「死者（ヒト以外の対象も含めて）を供養する」という言葉によって、多くの日本人は現在でも一定のイメージを共有し、その意味概要を了解し合うことができる。しかし、「死者供養」と総称される事象の歴史的形成過程や文化的な広がり、さらにはその現代の変容を学術的な視点から探ろうとすると、いずれも複雑な要因が絡み合っており、簡単な説明を許さない。本パネルは、平成一九―二一年度科研費「『供養の文化』の比較研究を

とおして見る『死』の表象の形成過程とその現代の変容」という共同研究の中間報告を兼ねて、「死者供養文化」の奥行きと広がりをもたらすことを目的とした。

当日は発表者による発題の後、中村生雄がコメンテータをつとめた。中村はまず、この共同研究の基本的な課題として、（一）日本における民俗宗教的な死者儀礼をささえる霊魂観や死後イメージの特徴を「供養の文化」という文化類型のもとに把握し、その歴史的・宗教思想的な形成過程を東アジア世界との比較研究を通して解明する、（二）今後の日本社会の動向においてそれがどのような意義と問題点をもつものであるかを、とりわけ現在大きく変容しつつある「死」の表象の行方を問うことを通じて、学際的・領域横断的に明らかにする、という二点を挙げ、本パネルの四名の発表が、それぞれ思想史、歴史学、宗教学、社会学の関心と方法に従って展開された意義を強調した。さらに、自らの闘病生活の体験や、空前のヒット曲となった「千の風になって」をめぐる昨今の議論、映画「おくりびと」の流行現象などに触れつつ、「供養の文化」を推進する主体が、供養される側（死者）から供養する側（生者）へと決定的に移行してしまったという大きな地殻変動を指摘したうえで、個々の発表に対する感想と質問を述べた。

佐藤の発表に対しては、天皇の現人神信仰に典型的なヒトガミ信仰に見られるような、血縁上の先祖を葬り祀る死者供養のあり方と、血縁につながらないいわゆる「祟り神」の祭祀とはどういった関係にあったのか、という質問がなされた。松尾の発表に対しては、弥勒下生で弥勒の説法にあずかるのは、肉体を